

国際ジャーナリストが語る 武器としての英語論

大野和基

最終回

英語の習得について考える本

つい最近、『外国语学習の科学—第二言語習得論とは何か』(岩波新書)の著者である白井恭弘氏と食事をしながら、英語についてさまざまな面から話し合う機会があった。日本人にとって英語学習とは何か、英語をマスターするというのはどういうことか、なぜ今までこういう本が出なかったのか。読むとわかるが、この本は「目からうろこ」的な内容で、他のいい加減な本とはまるで異なる。英語の学習法を論じた本のほとんどは、著者が自分の経験に基づいて書いているだけであり、しかもその当人がネイティブのレベルまで達していないから、半分詐欺である。著者自身が「私は映画の英語は聞き取れない」と開き直って、英語学習の本を書いているくらいだから、始末が悪い。それを読んでも所詮「早晩行き詰ります」と言っているのと同じである。一方、白井氏の著書は実際の研究に基づいてるので、信用できる。

日本語の美しさをここで述べる意味がないので省略するが、英語はネイティブにとっても難しい。以前にも書いたが、その難しさに気づいていないネイティブがほとんどである。が、英語圈にいる私の知人は作家、ジャーナリスト、コラムニストがほとんどだから、その英語の難しさと日々戦っている人たちだ。英語の発音について、白井氏は著書の中で「日本人英語でいい、通じればいい」といって最初から目標を下げておくと、それさえ達成できないでしょう」と言っているが、それは發音に限ったことではない。「目標を高く設定すること」は外国语をマスターしようとするときにも重要な要素で、目標は「限りなくネイティブに近づくこと」に置かないと本当の意味の上達はないと言っても過言ではないだろう。ビジネス英語の本には、直接的な表現や雅拙な表現がたくさん紹介されていることがあるが、教養あるネイティブはそういう英語

おおの かづもと

1955年兵庫県西宮市生まれ。東京外語大英米学科卒業後、79年渡米。97年帰国。コマツ大学で化学、ニューヨーク医学大学で基礎医学を学んだ後、ジャーナリストとして、話題の人物、国内外の人物へのインタビューを数多く手がける。最近は、活字だけではなく、TV取材にも精力的に取り組む。半刊ライターは90冊ほどで、年に4、5冊は日本にいない。代理出版をテーマにした著書が集美社新書より、2月に刊行予定。



は使わない。

さて、白井氏によると、コミュニケーション能力とは、言語能力（音声・單語・文法）、談話能力、社会言語能力（社会的に「適切な」言語を使う能力）を総称する言い方である。これを身につけるにはどうしたらいいかについては上記の著作を読んでいただくとして、さらには重要なことは、「言語はルールで割り切れない」ということを知識として知っておくことだという。発音に問題がなくても、日本人の英語が通じないのはなぜか。日本の学校で教えられた文法では「正しい」はずの英語が実際には通じないことがあるが、それは「ネイティブはそういう言い方をしないから」である。理屈ではなく、単に「言うか」「言わないか」だけである。

もう1冊衝撃的な本が出た。作家の水谷英苗氏が書いた『日本語が亡びるとき』（筑摩書房）である。彼女は12歳のときからアメリカで

育ったのに、わざわざ日本語を選んだ作家で、「なぜ自分は日本語に帰ってきたのだろう」という後悔を引きずりながら生きている、という。世界中にいる知識人は二重言語者で、英語が当たり前のようにできる。日本は英語ができなくても知識人の仲間に入れるとするという特殊な国だが、アメリカの窮屈が終わっても英語の窮屈は終わらない。

ノーベル物理学賞を受賞した益川敏英氏は、ストックホルムで日本語での講演を終えたあと報道陣にこう言い放った。

「世界の人に情報を発信するつもりなら、英語が話せなければ科学者として半人前。科学者ですから、世界中の人にコミュニケーションしないと」

これは科学者に限ったことでないだろう。いずれにせよ、この2種を説く、英語と日本語、はたまた言語の本質について考えさせられることは確かである。